

研究テーマ : 「読む」力から英語力の向上へつなげるための指導の工夫

所属 室戸市立室戸中学校

氏名 大西 万寿夫

RG JH2

1. 研究の背景

本年度は1年生から持ち上がりの3年生3クラスと、2年生2クラスのうち1クラスを担当している。3年生は生徒間の仲が良く、元気である。生徒たちの多くは明るく素直で活発であるが、いろいろな問題をかかえた生徒がいることも事実である。また、男女間の学力差が大きく、学習意欲の乏しい生徒が男子に多い。

一方で、3年3組は女子の前向きな意欲、態度に男子も刺激され、クラス全体として前向きである。このクラスで日々試みていることを、他のクラスでも生徒の実態に合わせ応用して取り組んでいる。3年3組を本研究の中心にすえ、リサーチを試みたい。

2. リサーチ・クエスチョン

「読む」力を高め、それを書く力などの英語力向上にどうつなげていけばよいか

3. 予備調査

(1) 授業観察結果

- ・単語の意味や基本表現・文法項目については理解できるが、その時はわかっているが時間が経つにつれ忘れる事が多く、また、家庭学習不足もあり定着が低い。
- ・英文を「書くこと」においては、日本語の語順と同じように英単語を並べて書く傾向が見られる。これは日本語と英語の語順を理解しきれていないことが原因であると考えられる。
- ・音読の得意なクラスと、そうでないクラスとでは英文を「書くこと」や「読むこと」に差が見られる。本クラスは2年生の時から「読む」力は総じて高く、シャドーイングにもすぐに慣れ、授業への意欲も高い。
- ・個々に目を向けてみても、「読むこと」が十分にできる生徒は「書く」力や「聞く」力も備わりつつあり、英語で言ってみようとする意欲も高い。

(2) アンケートによる生徒の意識調査結果

4月の調査では、英語学習において男子を中心に半数以上の生徒が「書くこと」（自己表現）に対して一番困難さや不安を感じている。9月の調査においては、男子も自分が力を入れて取り組むべき英語学習は「書くこと」だと認識している。

(3) 英語力を示すデータ ①CRT分析結果 ② 定期テスト結果 ③ 校内テスト（実力テスト）結果

①では女子は、ほぼ全国レベルにある。②、③においては個々の家庭学習状況などにもよるが、依然として男女の力の差がどのクラスにもある。

4. 仮説の設定

仮説① このクラスは「音読」に対する意欲が高い。「読むこと」を通して基本表現の定着、語彙や語句の定着を目指したシャドーイングやディクテーションを効果的に行えば、「書くこと」など英語力全体の向上にも効果があらわれるだろう。

仮説② 「学力差」の幅を縮小するためにも、「やってもわからない」という意識を取り除くことが先決である。

ペア・ワーク、グループ・ワークは比較的良くできているので、英語に苦手意識を持つ生徒たちにとってもこの活動は必要だろう。

仮説③ 英語の語順を意識させた「読み取り」や板書の工夫をすれば、語句や文節の意味、全体の意味も理解しやすくなる。「教師 ⇄ 生徒」の全体指導の中で、または「生徒 ⇄ 生徒」のペア・ワークやグループワークの中で、「日本語 ⇄ 英語」のやり取りを行えば「書く」「聞く」「話す」活動にもなり、英語力の向上にもつながっていくだろう。

5. 計画の実践

① 生徒には「シャドーイング」と称して、主に次のような3つのパターンを実行した。

ア： 最初にモデル・リーディングを聞いたあとで、教科書やノートを見ずに行う。次いで、教科書を見ながら行う。

イ： 最初からCDや教師のあとに続けて行う。教科書やノートを見ずに行う。次いで、教科書を見ながら行う。

ウ： 教科書を開き、最初から CD や教師のあとに続けて行う。そして、シャドーイングの後で必ずスラッシュ・リーディングを実施した。この際にはスラッシュで区切った

部分の、聞いたり読んだりした英語の「かたまり」の意味が即時に理解できることを目的とした。

- ② ディクテーションを行い、書き取った内容をペアやグループで確認させた。書き取りがどの程度正確にできたかもオープンにチェックさせた。相互協力ができ理解の度合いも良い場合は、即時に評価し学習に対する自信を持たせるようにした。この他、ワーク（副教材）の答えの確認や教えあいのときも同様に実施した。

- ③ 「主語 + 動詞・・・」＝（意味付け）

「動詞 + 目的語・・・」＝（意味付け）

「前置詞句」＝（意味付け）

「読み取り」を行う時、上のような方法で英語の語順を意識させるようにした。それぞれの英語の「かたまり」の意味をまず捉え、次いで全体の意味を日本語らしい言い方に直させた。英語の語順とその「かたまり」の意味を対比させながら同時に理解することを最大の狙いとした。

6. 実践の結果

- ① シャドーイングを行った後に音読をすると全体の声量が上がり、読み方もなめらかになり、それをきっかけに授業に集中して取り組むことが多くなった。「読める」、「読め始めた」ということが生徒の自信になってきた。
- ② 「より正確に書き取ろう」という気持ちで臨む何人かの生徒が、クラス全体へのいい刺激となっている。T・T に入ってくれる先生が、適切なタイミングで書くことが苦手な生徒を援助してくださったことも大きな効果がある。
- ③ 基本文よりやや長い程度の英語であれば、聞き取った後すかさずその意味や内容を把握し、発表しようとする生徒が増えた。このこともまた全体へのいい刺激である。さらに、英語の語順を意識した文を書こうとする生徒が多くなってきたことも成果である。

7. 結果の検証：アンケート結果（2004 年 12 月 20 日）より

ア： 2 学期、英語の力を伸ばすために自分が力をいれて取り組んだこと。

- ・単語や語句（60%） ・書くこと（43.3%） ・文法（40%）
・聞くこと／読むこと（33.3%） ・シャドーイング（26.6%）

イ： 「英語がわかり始めた」「英語の力が伸びた」など、自分の英語の力が向上したと感じる点は次のどの項目に一番近いのか。

- ・英語の文の意味がわかり始めた・・・（83.3%） ・リスニングがわかり始めた・・・（73.3%）
・英語の文の書き方がわかり始めた・・・（70%） ・英語で表現ができ始めた（言え始めた）・・・（50%）

ウ： 自分の力が向上したと思う理由は何か。

- ・シャドーイング・・・（43.4%） ・「文のかたまり」ごとによる英語文の理解の方法・・・（40%）
・英語の語順の理解・・・（30%） ・動詞テストや単語量の増加（家庭学習）・・・（30%）

8. 成果と今後の課題

今回の研修で最も頭を痛めたのが「仮説の設定」と「実践の方法」であった。男女の学力差が大きく、どこに焦点をあてて取り組めば良いかが、最初のクリアすべき課題であった。2 年次までの結果を振り返っても、教科書を読むことが不十分な生徒は英語の力が伸び悩んでいる。他の教科においてもほぼ同じことが言える。つまり、読解力＝読む力が学習全体の基盤となる。そこで生徒には 1 学期半ばに英語授業の意図と方針を示した。夏の研修では「音読」の重要性を再認識した。1 学期は手探りであったが 2 学期はとにかく「読むこと」からすそ野を広げる授業を試みた。行事や授業以外のことに教師は迫られたが、それでも生徒の多くは教師の意図することを受けとめ授業に集中した。振り返ればシャドーイングや「音読」なども、正確にそれらをさして言うべきものではなかったかもしれない。しかし、2 年次や 1 学期前半比べ格段に異なる点は、男子の「教科書を読む」態度・意欲が向上したことである。また、リサーチ対象以外のクラスでも同様の結果が得られており、女子は定期テストや校内テストで対象クラスに迫る結果が出てきたことは成果といえよう。「読むこと」が定着したことは前進である。

課題は成果に比べてたくさんある。いかなる理由があるにせよ、十分な準備ができずに実践に臨めなかったことは事実であるし、実践と検証が中途半端だったのではないかと反省している。英語を苦手とする生徒も上位層の生徒もそれぞれが達成感を持ち学習意欲が高まるように、このアクション・リサーチを継続して研究し「仮説の設定」と「実践の方法」をしっかりと身に付けた授業に取り組みたいと思う。